

主 題：二度目のいのち

聖書箇所：ガラテヤ人への手紙 2章19, 20節

「ただより高いものはない」と言われます。皆さんはそのような経験がおありでしょうか？私はそれらしきことに会ったことがあります。あるものをうしろに隠して言葉巧みにそれを売り込もうとしていたのですが、それに気付いてすぐに断ったため大事に至りませんでした。実際そのようなことがあって、お金で済む場合ならまだしも、それがいのちにかかわることならどうでしょう？

今日ともに見て行きたいのは、ガラテヤの教会です。ガラテヤ教会の人たちは間違った教えに混乱していました。ガラテヤの教会はパウロが建て上げた教会です。しかし、彼が去った後、ユダヤ主義者と呼ばれる教師たちが教会に入って来て偽りの教えを言い広め始めたのです。彼らは救われるためには「行ない」が必要であると言います。恵みだけで救われるなんて、そんな虫のいい話はない、行ないが必要なんだと…。パウロの教えは、救いは神が与えてくださる恵みであり、私たちは信仰によって救われるというものでした。そのため、パウロはガラテヤ教会の人たちにこの手紙を書いたのです。

2：19, 20をご覧ください。「しかし私は、神に生きるために、律法によって律法に死にました。：20 私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子信じる信仰によっているのです。」と、パウロはこのようにはっきりガラテヤ教会の人たちに教えるのです。「救い」それは「恵みである」と言います。救いは決して行ないによって得ることはできないと言います。

● まず、救いとは何でしょう？

救いとは「神に対して死んでいた者が神に生きる者となる」ということができます。パウロは言います、「**神に生きるため**」だと。パウロはかつて神に対して死んでいた者でした。実際に、私たち人間は神に対してどのような態度を取っていたのでしょうか？ローマ1：21にこのようにあります。「**というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。**」と、私たちは神を知っていたけれど、その神をまことの神としてあがめず、感謝もしなかった、すなわち、神を神として認めていなかったのです。そのように生きていたのです。皆さんも信仰を持つ前はそうに神に対して死んだ歩み、神とは関係のない歩みをしていたわけですね。それゆえ、ローマ5：10にあるように「**もし敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させられたのなら、和解させられた私たちが、彼のいのちによって救いにあずかるのは、なおさらのことです。**」と、私たちは神の敵であったのです。パウロ自身もそのことをよく知っていました。救いとは神との正しい関係に入れられ、神に生きた者となることです。「**神と和解させられた**」、つまり、神との正しい関係が回復されたと言うのです。そして、この救いは決して行ないによって得られるものではないのです。ですからパウロは「**律法によって律法に死にました。**」と言うのです。律法とは行ないです。パウロは以前、この律法を行なうことによって救われると信じていました。彼が救われる前の歩みはどのようなものだったのでしょうか？パウロはかつて律法に生きる者でした。ピリピ3：5, 6に「**私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きついのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、：6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。**」とある通り、自分はパリサイ人であったと言います。パリサイ人は神から与えられた律法を細かく調べて細かい規定をたくさん作っていました。そして、その自分たちが作った規定、教えを人々に教えて行きました。そして、彼ら自身もそれを行ない、その行ないを第一にして歩んでいたのです。そのために、彼らはその律法を守れない人を非常に軽蔑したのです。そして、「**律法による義についてならば非難されるところのない者です。**」とあるように、行ないについてはだれからも非難されるような者ではなかった、律法を懸命に行なっていたと言うのです。そのパウロが私は「**律法に死にました。**」と言うのです。この「**死にました。**」ということばはギリシャ語の不定過去という時制が使われていて、これは過去にもうすでに起こったことを意味します。私は律法に対しては過去にもう死んだ者なのだとパウロは言っているのです。

「律法に対して死んでいる」とはどのようなことでしょうか？皆さんすべてに今共通していること、それは今生きているということです。そして、また死ぬことも共通しています。死んだ後、この世に対して何か行なうことができるでしょうか？私たちは死んでしまうとこの世とは全く関係がなくなります。パウロは、律法に縛られていたかつての自分はもう死んで、律法から解放されたと言うのです。行ないによって救われることはない、パウロははっきり言うわけですね。皆さんは救いについてどのように考えておられるでしょう？何か良いことをしたら、様々な決められていることを忠実に守れば救われるのではないかと思っておられるならこのように考えるかもしれません。毎週教会に来ている、だから私

は救われている、また、聖書を毎日読んでいるから、神さまにいつもお祈りをしている、こんなにも多くのものを捧げているから救われているのだと。しかし、聖書ははっきり教えています。どのような行ないであってもそれによって救われることはない。ですから、パウロは「**神に生きるために、律法によって律法に死にました。**」と、神に生きる関係に入るために行ないは何一つ必要ないと言うのです。

● では、救いを得るためにどうすればいいのでしょうか？

どうすれば救いを自分のものにすることができるのでしょうか？ 20節「**私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。**」。

(1) 救いは自分の罪深さをよく知ることから始まる

自分がどれほど罪深いか、パウロはそのことをよく分かっていました。また、キリストの十字架の意味もよく分かっていました。ですから、「**私はキリストとともに十字架につけられました。**」と言うのです。どうしてキリストは十字架につけられたのか、キリストに何か十字架につけられるほどのことがあったのでしょうか？聖書ははっきりイエスには何の罪もなかったと教えています。では、なぜ罪のない方が十字架の刑につけられたのでしょうか？それは私たちの身代わりであったのです。パウロは自分の代わりにイエスが十字架にかかって死んでくださった、そのことをよく理解していました。ここで言われている「**十字架につけられました。**」ということばは完了形が使われています。過去にあったできごとが今もずっと続いているという意味です。パウロは今も自分は十字架につけられていると分かっていたので、続いてこのように言います。「**もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。**」と。パウロはこのように告白しています。Iテモテ1：15「**キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。**」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらすです。」。また、ローマ7：15では「**私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行なっているからです。**」と書いています。自分が憎むこととは罪です。彼自身、律法を行なおうとしていたけれど、実際に自分がしていることは罪である、自分がいかに罪深い者であるかを告白しているのです。そのようなパウロでしたから「**私はキリストとともに十字架につけられました。**」と、キリストの十字架は私の身代わりであったと確信して言うことができたのです。皆さんは罪ということにどのような認識をもっておられるでしょうか？パウロが告白しているこれほどの罪の思いがあるのでしょうか？確かに、罪はよく分かるけれど、それを自分の周りに照らして、もっとひどい罪がある、自分はそれほどでもないと思ってしまう、そのようなことはないでしょうか？律法を守り正しいことを行なおうとしていたパウロは、自分の罪深さに気づき、キリストの十字架が真に自分のためだと理解したのです。十字架は私たちの身代わりであったとパウロはそのことを私たちに教えるのです。

(2) 救いは信仰によって得ることができる

20節の後半「**いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。**」とパウロは言います。救いはキリストを信じることでであると。信じるということばを私たちはよく使いますが、それは信用することです。相手がいてその人に信頼を寄せること、それゆえ、その信じるという行為を見たときそこには行動が加わってくるのです。たとえば、皆さんがだれかにお金を貸すとして、それがすごい額だとするなら、そのお金を貸す相手とはどんな人でしょうか？本当に信用できる人、信頼できる人、心からその人を信じているはずで、信じているからお金を貸すという行動が伴うのです。知識として知っている、認めているというだけではないのです。確かに、聖書を見ると、キリストがどのような人物であったか、十字架にかかった、それは知っている、これは決して信じていることではないのです。パウロはそのことを聞き理解したゆえに、そのイエスを信じ、そして信頼して彼に従って行こうとしたのです。

(3) 救いは恵みによって与えられる

そのイエスは私たちにどのようなことをしてくださったのでしょうか？そのことをここで教えてくれています。「**私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子**」と、キリストが私を愛してくれていた、こんな私のためにいのちを捨ててくださった、それがキリストが為してくださったことです。パウロ自身、自分の以前の生活を考えたとき、それがどれほどの恵みであるかということを思わずにはいられなかったのです。なぜなら、彼はキリストを迫害していたのです。そして、キリストを信じる者たちを捕まえて牢に放り込んでいた、そのような者でした。完全に神に敵対して歩んでいた、けれども、そのような私のために、私を愛しいのちを捨ててくださった、そのことをパウロがほんとうに知ったとき彼の歩みは180度変わったのです。ピリピ3：8を見てください。「**それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとと思っています。**」、私の主であるキリストを知ったそのすばらしい恵みのゆえに、彼は以前彼がもっていたすべてはゴミ同然のものだと言うのです。彼の以前の生活は人の羨

むようなものでした。実際、すばらしい家系に生まれて知識も積み財産も持っていました。一見すると、こんなすばらしい幸せな人はいないと私たちは思います。しかし、パウロはキリストを知ったゆえに、自分が持っていたそれらすべてのものを「ちりあくた」と言うのです。キリストの恵みがどれほどすばらしいかがよく分かっていたからです。キリストの愛についてエペソ人への手紙5：2をご覧ください。

「また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。」とあります。私たちを愛してご自分をささげてくださったと。また、ガラテヤ1：4には**「キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。」**と、私たちを罪から救い出そうとしてご自身をお捨てになった、死んでくださったのだと言います。これは神の恵み以外何ものでもないパウロは信じたゆえに、彼の生活が180度変わったのです。

私たちにとっても同じことが言えます。私たちも神を知る前は神と敵対して、神を神と認めない歩みをしていたわけです。けれども、そのような私たちを神は愛してくださっていて、私たちのためにいのちを捨ててくださった、このようなキリストであるから私たちはイエス・キリストを信じ信用し彼に信頼を寄せるのです。皆さんはパウロのようにキリストに対するこのような思いをもって歩んでおられますか？こんなすばらしい恵みをくださったのだと…。パウロはそのことをほんとうに理解していたので、この手紙を書いたのです。まちがった教師たちは救いは恵みだけではない、行いによって得るのだという、そのことにパウロは憤りさえ覚えたのです。そうではない、救いは恵みによって得ることができるのだと教えるのです。

救いはどのようなものであるのか、今みことばから見てきました。恵みによって救いを得ることができるとパウロははっきり言いました。この恵みを受けた私たちクリスチャンは、パウロと同じ思いをもって歩んでいただきたい、また、私自身も神から与えられたすばらしい恵みを覚えて歩んで行きたいと思っています。